

## チェス名人、マクベス、神の介入：ゼレンスキーの最期

<https://www.rt.com/russia/578910-zelenskys-zugzwang-ukraines-blitzkrieg-has-failed/>

RT

June 30, 2023

冒頭の題と RT の英語による記事は同じではない。意図的に変えている。後者は日本語に訳せば、「**ゼレンスキーの強制指し手** (パスができできない状態)：**ウクライナの電撃作戦は失敗した**——では、**大いに宣伝された反転攻勢はどこで投了するのか?**」という、チェスの比喩を使っている。

面白いことに、SOTN による「ワグネル事件」の解説もチェスの比喩を使っている：——「**プーチンのワグネル作戦：チェス名人の非常に危険だが必要な心理作戦**」。これは現在のウクライナ戦争の戦況が、チェスの比喩を使いたくなるような、奇跡的な知能ゲームになっていることを意味しないだろうか？ プーチン名人の「ワグネル作戦」は、プリゴジンがプーチンの料理長として給仕している証拠写真によって、これが作り事ではないことがわかる。(傭兵としての)プリゴジンは、プーチンの食べ物、飲み物を預かっていて、いつでも命を狙える立場にあった。しかしプーチンはそれを知りながら、「**非常に危険なしかし必要な**」チェスを指していた——というのが SOTN の解釈である。

そんなことは証明できないという人はいるだろう。しかしこの解釈は完璧だと思われる。ラヴロフ外相は、世界をあっと言わせたこの事件を、外国メディアに明瞭に説明し、これ以上の詳しい説明をする義務は我々にはない、ロシアの分裂を勸導する人はどうぞ勝手に、と小気味のよいことを言った。これ一つをとっても、ロシアは反露勢力にチェス能力でまさっている。この勝負はワグネル集団の代表プリゴジンの負けだった。彼を使喉したのは、CIA、MI6、MOSSD の者たちだったが、彼らの負けだった。これはスコット・リッターも、SOTN も同じことを言っている。

ひとつおそらく人々が見逃している、プーチン大統領の発言がある：——彼はウクライナ側の反転攻勢を説明するとき、敵方の大量被害の数量を詳しく説明しながら、「**奇妙なことに**、それは今のところ、生焼け (slow burn) 状態にある。なぜなら敵は、深刻な兵員と装備の損失を被っているからだ」と言った。

なぜ「**奇妙なことに**」なのだろうか？ これは、戦果が思いがけず成功したことを、言っているように思える。ロシア側は、もっと華々しい双方の戦闘を予想していた。しかし思

いがけず敵は簡単に打ち砕かれたようである。このプーチン発言の後、数日たっているが、その報道を見る限り、ほとんどすべての戦況が、なぜかうまくいっている。私はもっぱら、RTとSputnik International、Sputnik日本、それにAlex JonesのInfowars、たまにSOTNしか見ていないが、どのニュース項目を見ても、ロシアが断然優勢で、ウクライナが絶望的であることを伝えている。これはペンタゴン、NATO、それにウクライナ自身の側でも、口を揃えて悲観的な現状を伝えており、不思議なことに、アメリカを初め各国から供与された、優秀なはずの重量戦車や兵器の、ほとんどに欠陥があり、あるいはすぐには使えないと言っている。それに対し、ロシアの兵器や兵士は、どの点を比べても、遥かに優秀だと言っている。これはニュースソースがロシア側だから、身びいきや間違いが含まれているかもしれない。しかしウクライナ側は、全体が遅れていて、全体が使えないひどい状態のようである。それがあまりにも申し合わせたように、対照的になっている。

なぜだろうか？ なぜそういう「奇妙なこと」が起こっているのだろうか？ これはあらゆる要素を勘定に入れても、当たり前のことでも、単なる僥倖でもないように思える。私はこれを、歴史的に大きなことが起こるときに「大きな力」が働いているのだと解釈する。そういう説明を嗤って相手にしない大勢の人がいるだろう。しかし私のような信念を持つ人もいるだろう。歴史は唯物論によって、唯物史観によって動いているのではない。歴史は生きて動いている。世界を2つに分けるこの戦争は、判断しにくい要素も含めて、大きく**神の側と神の敵の側**に分かれている。わが国政府は、最も典型的に「神の敵」の立場を取っている。これもまた馬鹿にする人が大勢いるだろう。そのように考えないように訓練されているからである。しかしラヴロフ露外相とともに言いたい——どうぞ判断はご自由に、ただ私は、「紆余曲折ののち、ロシアから世界の光が差してくる」と言った、エドガー・ケイシーの予言を信ずる。

私はこのブログで何度も同じことを言ってきた：——我々の置かれた状況を理解するには、シェイクスピアの『マクベス』を読むといい。これはマクベスという武将が、主君であるダンカン王を（プーチンのように）綿密なチェスのような計算を立てて殺すが、プーチンとは逆にうまくはいかず、滅びの一途を辿る物語である。それは悪あるいは「神の敵」の宿命として、歯車のようにギリギリと定められた運命に巻き込まれていく。これを見ている観客は誰も、マクベスが途中で勢い取り戻して（期待されたゼレンスキーのように）最後に勝利するとは思わない。そこには有名な三人の魔女が出てきて、マクベスの運命を予言する。これも自らをサタンと公言し、子どもを食い物にする——両手に子供を抱えたバフォメット像を見よ——没落一途のバイデン大統領とアメリカの、宿命に似ている。

悪魔の力を借りるホワイトハウス、Deep State、民主党といったものを想定しなければ、何も肝心のことは理解できない。現在の世界の指導者の中で、それを一番よく知っているのは、プーチン（とロシア指導者）である。CIAとは何か、それがどれだけ悪魔的な機関

であるかを知らないで、チェスが指せるような、この世界は甘い世界ではない。いつもは穏やかなプーチンが、語気を強めて言ったことがある：——「私がウクライナの領土を欲しがっているって？ 私を舐めるな。私の狙いはもっと高いところにある。それはこの世界の悪の根源を倒すことだ。」

ひとたびこのような世界観を取り入れ、この世界が唯物論で動いているのではないこと、マクベス將軍は、主殺しを隠し、宣伝によって世界を騙すことで成功はできないという道理を信ずるならば、人々は、デイヴィッド・ウィルコックの言う「**神の介入**」divine intervention が自然のことであると考えようになるだろう。

いったい、2012 ロンドン・パラリンピックの劇を理解している人が、どれだけいるだろうか？ あれはただのふざけた余興ではない。なぜ、あんなひよろ長い悪魔のようなものが、病院のベッドの間を歩き回り、側頭部に傷をもった巨大な赤ん坊が寝ているのか？ なぜ手足のない亀のような身障者に、床を歩き回らせるのか？ …彼らはシェイクスピア劇『テンペスト (大嵐)』のテーマが、神の主権と、主権の篡奪であることを知っていて、神を愚弄し、神の主権を奪うために、この出し物を、大金をかけて考案したのである。彼らは知能犯的なチェス作戦を成功させたつもりだった。

驚嘆すべき碩学 SOTN は、プーチンが声を荒げたのと同じ語気で、こんなことを言っている：——

---

中国人ではないのだ、馬鹿め、・・・ハザール陰謀団だ

<http://stateofthenation.co/?p=173372#more-173372>

これについては次回に、翻訳紹介しようと思う。

---